

ヨハネの手紙第一 2 章。ヨハネの手紙は 100 歳近く年老いてきた最後の使徒ヨハネによるものであります。自分のことを“長老”とも呼んでおりますけれども、そのヨハネの望みとは、先週学んだようにヨハネが当時のクリスチャンたちに望んでいたこと、願っていたこと、それは現代の私たち教会にも望まれていることですが、私たちがキリストご自身を体験するということです。キリストご自身と個人的な、人格的な交わりをもつということであり、ちょうどそれは 1 章 3 節にも書いてありました。『私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは（フェロシッポとは、コイノニアとは）、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。』キリストの現実を、リアリティーを個人的に、人格的に私たちクリスチャンが体験するというのが、この手紙の書かれたことの 1 つの目的であり、ヨハネの強い願いでありました。キリスト教は宗教ではありません。「キリスト教は関係だ。」と、よく皆さんにはお伝えしております。これはよく英語で言われることですが、”Christianity is not religion. (宗教じゃない。むしろ) relationship(関係である。)”キリスト教は宗教ではなくて、神との関係。つまり交わりだということです。キリスト教はただの観念・哲学・思想・信条ではありません。キリスト教はキリストなんです。キリスト教はそのようなドグマ”dogma”とか、イデオロギー”ideology”ではないんです。キリスト教はキリスト。ただ一言であります。キリスト教とはキリストなんです。ですから、もしキリスト教をただの宗教だとか、信念だとか、思想・信条・哲学・観念だと思っていたら大間違いであります。キリスト教という呼び名がそのような印象を与えてしまうかもしれませんが、「クリスチャニティー”Christianity”という英語、キリスト教と訳されますけれども、それはまさに「キリストを体験する、実感する、実践する」という意味で使われる言葉であります。キリスト教はキリストである。”Christianity is Christ.”そのことも今この手紙の中で見ることになります。キリストの現実を、リアリティーを個人的に、人格的に、パーソナルに体験するということです。

で、先週はこの手紙のアウトラインも説明しました。1 章 2 章は、神の光を体験するということ、経験するということでした。”Light”光という言葉キーワードに挙げました。3 章 4 章は、神の愛を体験する、若しくは経験するという内容です。”Love”愛というキーワードです。最後の残している 5 章は、神の命を体験する、経験するという内容であります。”Life”命がキーワードでした。英語では 3 つの”L”で、3L で表現されています。神の光、神の愛、神の命。それらを私たちクリスチャンは個人的に、人格的に体験出来るのです。それがキリスト教なんです。ただ思想を学ぶのではありません。道徳の教え、倫理の教えをただ学ぶのではないんです。キリストという人格をお持ちの神が、人となられた神がここにおられて、皆さんはその神と向き合うことが出来、会話することが出来、何でも相談出来て、そしてこの方の臨在に、存在にあなたは心を満たされます。これ以上の喜びは他にはありません。そのことをこの手紙の学びを通して皆さんにも是非ともこれまで以上に体験して頂きたい、実践して頂きたいというのが、この私の願いでもあります。

今日は 2 章でアウトラインで言いますと、その神の光を経験する、体験するというその続きであります。それは『神の光の中を歩む』という言葉でも表現されておりました。ちょうど 1 章の終わりの方に、そのような表現がありました。光の中を歩むこと、これが神との交わりでもあります。で、2 章 1 節に早速そちらに目を移して頂きたいと思えます。『私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もしだれかが罪を犯すことがあれば、私たちには、御父の前で弁護する方がいます。義なるイエス・キリストです。』神の光の中を歩むということは、具体的には『罪を犯さないで生きる』ということでもあります。でも、私たちは皆このことも体験的に、経験的に知っております。確かに私はクリスチャンとして罪を犯したくはない。罪を犯さないで生きることも出来るようになった。それは素晴らしいこと。かつてはありえなかったこと。罪でがんじがらめになって、罪しか犯すことの出来

なかったそんな惨めな真つ暗闇から私は解放された。にもかかわらず、光の中に置かれたにもかかわらず、罪を犯してしまうという現実もまたあるわけです。ですから、ここには『**もしだれかが罪を犯すことがあれば**』、もしあなたがなおも罪を犯すことがあれば、(絶望ではありません。希望があります。)あなたを弁護して下さる方があります。その方は、『**義なるイエス・キリスト**』であると。弁護して下さる方、これは弁護士とも訳せます。ギリシャ語では「**パラクレイトス**」parakletos”おなじみの言葉です。「**パラクレイトス**」。ヨハネの福音書 14 章 16 節の中に『**助け主**』と訳されている言葉がありますが、その原語も「**パラクレイトス**」であります。または 26 節にも同じ言葉が使われています。その『**助け主**』「**パラクレイトス**」その原意は『**そばに居て援助してくれる者**』という意味です。そばに居てあなたを援助してくれる、助けてくれる。ですから『**助け主**』とも訳せますし、あなたをそばに居て弁護してくれる「**弁護士**」または「**慰め主**」などとも訳せる言葉であります。励ます方。それがヨハネの 14 章では聖霊なる神のことを指しておりましたが、**第一ヨハネ 2:1** では、それは『**義なるイエス・キリスト**』のことも指しています。ですからイエスは『**もうひとりの助け主**』という言い方をしているわけです。ヨハネ 16 章にもそういう表現があります。イエスも助け主なんですが、もうひとりの別の助け主。それが聖霊なる神であると。イエスが天に上げられてから、“**キリストの御霊**”としても聖霊が私たちにも与えられるということ。それが助け主と。あなたのそばに居てあなたを常に助けてくれる、支えてくれる、守ってくれる。そして罪を犯した時には、弁護して下さる方。聖霊とイエス・キリストは実質同じ働きをするわけです。神はイエス・キリストを通して私たちを見て下さいますから、私たちはたとえ罪を犯したとしても、**義なるキリスト**のうちにあるものとして咎められることはありません。神から見ると、イエス・キリストしか見えてこないわけです。クリスチャンはキリスト・イエスのうちにある者です。キリストというシェルターの中に私たちは、言わば隠されているわけです。ですから神の目から見るとあなたの罪は見えないで、キリストの姿しか、罪の無い方しか、義なるキリストしか見えないわけです。それが『**キリスト・イエスのうちにある**』ということです。**ローマ 8:1**にもその言葉が使われています。キリスト・イエスのうちにある者、すなわちクリスチャンは、罪に定められることは決してありません。ですから確かにクリスチャンの現実として罪を犯したくなくても罪を犯してしまう。そういう弱さがあります。でもその話は先週も見ましたように、私たちはその罪を言い表すことが出来ます。そしてその罪を告白して、認めて、悔い改めることが出来ます。そしてキリストの血潮にすがって、すべて洗い清めて頂くことが出来ます。きれいさっぱり、まるでこれまで 1 度も罪を犯したことの無い者のように義と認めて下さるわけです。ですから私たちはもはや罪悪感・罪責感からも解放されるわけです。そういう縛りから解放されるわけです。「過去において取り返しのつかないことをしてしまった。」とか、今現在自分の弱さに打ちのめされて、「なんて自分は情けない、不甲斐無い者だろうか。」そんなことでくよくよしなくて済むんです。足元をずっと見なくても済むんです。過去ばかり振り返っていないでも済むんです。「もう私は赦された。私の義ではなくて、キリストの義によって。」

そのことがこの**ヨハネの手紙の 1 章**の終わりから**2 章**にかけて書かれていることですがけれども、今ここで皆さんにイメージして頂きたいことがあります。それは神の法廷であります。父なる神が裁判官です、判事です。そしてイエス・キリストが私たちの弁護士。そして私たちは、勿論そこでは、法廷では、被告ということになるわけです。で、私たちは訴えられているわけです。訴える者、それは告発者と呼ばれるサタン・悪魔であります。**黙示録 12:10**に、悪魔は、サタンは、日夜私たちを神の前で訴える者である。告発する者であると言われております。悪魔は中傷者という意味です。ギリシャ語で「**ディアボロス**」と言いますが、それは「**中傷する者**」、常に悪魔はあなたのことを中傷しています。しかしグッド・ニュースがあります。私たちの傍らには、そばには、隣には私たちを弁護して下さる方がいます。その方こそ、義なるイエス・キリストです。この弁護士は、タダで無料で私たちの弁護を買って出てくれます。いちいちアポイントを取らなくても大丈夫です。いつでもこの方は私たちのために立ってくれます。私たちの弁護をしてくれます。最高の弁護士であります。その法廷のイメージを常に持って頂いて、いくら悪魔があなたを中傷しても、あなたの罪を告発しても、あなたには最高の弁護士がついております。勿論この世の最高の弁護士と重ねないで下さい。この世の最高の弁護士は、金に目がくらんだ者たちであります。彼らは正義も平気でねじ曲げます。いわゆる敏腕弁護士、優秀有能な弁護士という者たちは、法の抜け目を常に探しながら事実をねじ曲げる、真実をねじ曲げることが得

意であります。悪人を平気で善人に仕立て上げることが出来ます。金を出せばいくらでもそれが可能であります、イエス・キリストはそのような類の弁護士とは全然違います。つまり私たちの罪を完全に処理して下さった上で弁護して下さい方です。この世の敏腕弁護士は、罪をそのまま残した形で、事実をねじ曲げる形で、お金を取って、そして悪を働くわけですが、しかし、イエス・キリストはそのような罪は罪としてしっかりと処理して下さい。その処理というのが十字架の話であります。その処理というのが**第一ヨハネ 2 章 2 節**以降に書かれていることです。この方こそ私たちの罪のための、私たちの罪だけでなく世全体のためのなだめの供え物です。この弁護士イエス・キリストは、なだめの供え物となって下さいました。『**なだめの供え物**』というのは、「ヒラスモース」"hilasmos"というギリシャ語なんですけれども、これは「怒りを鎮める」という意味の言葉です。ですから「なだめる」というわけです。何の怒りを、誰の怒りをなだめるのか。それは、私たちの罪に対する神の怒りをなだめるものであります、鎮めるものであります。それがイエス・キリストであります。

ローマ 3:25 にも同じ言葉が使われております。『**神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。**』と。イエス・キリストはなだめの供え物、又はなだめる者となって下さった。

又、ヘブル 9:5 には、こちらにも同じ言葉が使われております。『**また、箱の上には（この『箱』というのは契約の箱、神の箱です。中には 10 の言葉、十戒が入っていました。その箱の上には）、贖罪蓋（蓋のことです。）を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。しかしこれらについては、今いちいち述べることはできません。**』私も同感です。今いちいち述べることは出来ないんですが、ただ一言だけ。この『**贖罪蓋**』という言葉がギリシャ語ではやはり「ヒラスモース」であります。又は違った表現では、同じ語源ですけれども「ヒラステーリオン」という言葉でもあります。同じ意味ですけれども「怒りを鎮めるものとなられた」、又はこの『**贖罪蓋**』というのは他の訳では「**憐れみの座**」とも訳される言葉です。なだめる、神の怒りを鎮める。そして、それは神の憐れみでもあるということでもあります。イエス・キリストはまさにこの**贖罪蓋**、贖罪の蓋ともなられた。中には 10 の言葉が入っているんです。十戒が入っています。私たちはこの神の言葉に、神の基準に、スタンダードにととても見合うことは出来ません。十戒を破れば、私たちは罰せられるわけです。でも、そこには蓋がされているわけです。それが**贖罪蓋**です。それが**憐れみの座**です。それが神の怒りを鎮めるものです。そこには生贄の血が 7 度振り注がれました。それによって罪がカバーされる、贖われるということがなされたわけです。ですからこの**贖罪蓋**は、十字架のキリストを指しているわけです。イエス・キリストは、神の子羊として私たちのすべての罪を取り除く方でもあります。『**見よ。世の罪を取り除く神の子羊**』と呼ばれました。でも、同時にイエス・キリストは、私たちの罪に対する神の怒りを取り除くものともなって下さったわけです。神の怒りを鎮める**贖罪蓋**、なだめの供え物ともなって下さいました。私たちの罪をただ洗い清めるだけではなくて、聖なる神の所謂義憤というもの、義なる憤り。義なる神は、罪を見過ごすことは出来ません。悪徳弁護士のように罪をねじ曲げるということは出来ません。必ず正義を打ち立てられる義なる神です。正義の神です。公明正大の神です。ですから罪をごまかしたり、見過ごしたり、なかったことにする、水に流すということは出来ないんです。でも、この罪をきれいさっぱりするために、水ではなくて御子の血によって流して下さい方。御子の命によって罪の罰金を全て支払って下さる方。完全なる正義がここに樹立されたわけです。それによって私たちの罪も贖われ、神の怒りも同時に鎮められた、なだめられたということです。

これはよく皆さんも聞いたことのある実話だと思いますが、アメリカである青年がスピード違反をしました。警察に捕まって、そして裁判所に連れてこられて、判事の前に立ちました。その青年は安心しました。というのはその判事が自分の父親であったからです。「あー良かった。親父が裁判官で」と。ところが父親は、その息子である被告人に対して「あなたのスピード違反は罰金(5,000ドルとか高い莫大な罰金)と、若しくはそれが支払えなければ何十年かの禁固刑である」というようなことを言い渡しました。息子は信じられない目で判事を見つめました。「お父さん、僕です。助けて下さい。」それに対して裁判官は「法廷では私はあなたの判事である」と。そして、勿論青年はまだ働い

てもいなかったので、そんな罰金を払うことも出来ず、結局は禁固刑を言い渡されました。そして法廷を後にしようとした時に、判事である父親は青年のところに、その息子のところに降りてきて、そして判事のガウンを脱いで「私は今あなたの父親として、あなたのためにあなたが支払えなかったこの罰金を代わりに払うことにする」と。「息子よ、私があなたの罰金をカバーする。」と言って、そのことで罰金が払われたので、息子は禁固刑にならずに済んだという。これは実話でありますけれども、私たちの父も同じことをして下さいました。裁判官としては、罪は見過ごすことは出来ません。罪は罪として必ず罰する、裁くということをするわけです。でも、同時にこの方は慈愛に満ちた父なる神であります。ですから私たちのためにガウンを脱いで、そして私たちが払えなかった罪の罰金を払って下さったわけです。神であるにもかかわらず、神としてのあり方を捨てて、神としてこの世に来てくださって、人となられて無にされて、そしてまさにガウンを脱ぐようにして、神のありとあらゆる栄光・権威・権力を投げ売ってでも、ご自身の命を代価として私たちの罪の代価に充てがうために十字架の死にまで従って下さったわけです。それが私たちの神です。それが神の愛であります。それが『**なだめの供え物となられた**』ということです。ですから、もはや告発者であるサタンは、私たちを訴えることは出来ません。もう罪は処理されたんです。もう私たちは義と認められて、無罪放免となったわけです。ですからいくら罪を犯しても、もう罪の罰金は支払われたわけです。もうその罰はすでに御子が負って下さいましたので、サタンの訴えというのは、これは不当な訴えとなるわけです。もうその事案というものは、既に処理されたわけです。

先程、**黙示録 12:10**の中に、私たちの敵であるサタンは、「私たちが日夜告発する者だ。」というふうに言いましたけれども、その次の節、**黙示録 12:11**を見て欲しいと思います。『**兄弟たちは、小羊の血と(イエス・キリストの血と)、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に(告発者であるサタンに)打ち勝った。**』勝利したと。子羊の血、イエス・キリストの血にすがって、その血はすべての罪から私たちを清めます。そして“**あかしのことば**”、これが聖書の言葉です。あなたの罪はすべてイエス・キリストが代わりに負って下さって、すべて取り除いて下さって、カバーして下さい、神の怒りまでも鎮めて下さった、なだめて下さった。ですから私たちは、**御子の血とそのあかしのことば**によって、サタンの攻撃に対して、誘惑に対して、告発に対して、中傷に対して勝利することが出来ます。

テキストに戻って頂きたいと思います。もう一つまた皆さんにイメージして頂きたい場面があります。それは旧約聖書の中であります。**ゼカリヤ書 3:1**を見て下さい。『**主は私に、主の使いの前に立っている大祭司ヨシュアと、彼を訴えようとしてその右手に立っているサタンとを見せられた。**』これもまた天における法廷の場面であります。“**主の使い**”とは、旧約聖書の中でよく使われているフレーズですが、それは**受肉前のキリスト**を指す言葉です。**受肉前のキリスト**。肉体をとってイエスとしてお生まれになる前のキリストです。**主の使い**、これは**受肉前のキリスト**のことです。“**大祭司ヨシュア**”これはモーセの後継者のヨシュアではありません。約束の地にイスラエルの民を導き入れたヨシュアではありません。大祭司のヨシュアです。ちなみにイエスという名前もヘブル語ではヨシュアと言います。イエシュアと正確には発音しますが、「ヤーウエは救い」という意味の言葉ですが。大祭司ヨシュア、ちょうどバビロンの捕囚からエルサレムに帰還した時の霊的指導者であったわけです。その大祭司ヨシュアを訴えようとサタンが天の法廷に告発者として現れております。でもそこには**受肉前のキリスト**がおられるのです。**第一ヨハネ 2:1**で見た、あの弁護して下さい方、義なるイエス・キリストのことです。

で、**2節**を見て下さい。『**主はサタンに仰せられた。「サタンよ。主がおまえをとがめている。エルサレムを選んだ主が、おまえをとがめている。これは、火から取り出した燃えさしではないか。」**』“**エルサレムを選んだ主が**”というフレーズは特筆すべきであります。『**主がとがめている**』の後に、わざわざ“**エルサレムを選んだ主が**”と強調しております。エルサレムという町は神の都の首都としては決して相応しいものではありません。また世界の首都としてエルサレムは決して相応しい都ではありません。岩だらけの何もないところなんです。しかし、そのようなエルサレムが主に選ばれたということ。これが特筆すべきことです。エルサレムのような何もない、無味乾燥なただの岩地です。ただの大地です。そこが神の都となるということ、聖なる都となるということ。これはあり得ないことです。でも、このエルサレムが選ばれたように、私たちも神に選ばれたんだということを忘れてはいけません。エルサレムのような

都も選ばれたんですが、私たちのような者も、あなたのような者も選ばれた。その主が、サタンを咎めているんだと言っているわけです。これは**第一コリント1章**にも書かれているように、私たちは人の目には弱い者、愚かな者、取るに足らない者、無に等しい者だと。エルサレムのようなものです。しかし、私たちは主に選ばれたんです。一方的な恵みによって私たちは選ばれたんです、救われたんです、召されてきたわけです。

で、また**ゼカリヤ書 3:3**の方に今度は目を移して頂きたいのですが『**ヨシュアは、よごれた服を着て、御使いの前に立っていた。**』大祭司ヨシュア、彼が汚れた服を着ている。あり得ないことです。大祭司は大祭司の式服というもの本来は身に着けているはずで、エポデを身に着けているはずで、その胸当てには12の宝石、それらは一つ一つ12部族を表すものでありました。荘厳な美しい聖職者としての制服を着ていたはずですけども、しかしそれが汚れていた。大祭司の義であったとしても、所詮は神の前では汚れたものに、汚れた服に映るということでもあります。**イザヤ 64:6**には「**私たちの義は、人間の義は、汚れた着物のようだ。**」とあります。汚れた服だと言ってもいいと思います。その汚れた着物とは、直訳すると『**月のもので汚れたもの**』女性の月経で汚れたものだと言っているわけです。人間の義なんて、神の目にはむしろ忌み嫌うべき、生理の血で汚れた下着であると言っているわけです。露骨な表現です。でも、それは聖書が言っているわけです。あまりにも露骨なので意識して『**汚れた着物のようだ。**』と言っているわけです。人間の義というのは、そういうものです。大祭司の義であっても、それは汚れた服なんです。聖なる、義なる神の前では、所詮は私たちがどんな善行を積んでも、どんな功德を積んでも、それは汚れた着物、汚れた服に過ぎません。人間の最大努力をもってしても神のスタンダードには見合うことは出来ません。

しかし、ここで**4節**を見て下さい。**ゼカリヤ 3:4**『御使いは、自分の前に立っている者たちに答えてこう言った。「**彼のよごれた服を脱がせよ。**」そして彼はヨシュアに言った。「**見よ。わたしは、あなたの不義を除いた。あなたに礼服を着せよう。**』」素晴らしいです。汚れた服を脱がせて、そして神がご自身の礼服を着せて下さる。この礼服とは勿論神の義であります。人の義は汚れた衣服であります、神の義は礼服であります。

5節にも『**私は言った。「彼の頭に、きよいターバンをかぶらせなければなりません。」**すると彼らは、彼の頭にきよいターバンをかぶらせ、彼に服を着せた。そのとき、主の使いはそばに立っていた。』義なるキリストが弁護士として立っておられた。新約聖書の中では、私たちクリスチャンはすべてキリストという義の衣を着せられている、とあります。「**キリストを着なさい。肉の欲に心を用いてはならない。**」とも言われています。**ローマ 13:14**にもそういう言葉が使われております。また**ガラテヤ 3:27**にも「**キリスト・イエスを着なさい**」と。キリストという義の衣を着なさい。アダムとエバがかつて罪を犯してしまった後に、自分たちの義の衣をイチジクの葉っぱで繕ったんですけれども、それは所詮はイチジクの葉っぱで枯れてしまえば終わりです。私たちの義なんていうものはそんなものです。でも、神の義の衣の象徴である皮の衣がその代わりに着けられました。その皮の衣こそ初めて人の罪の故に生きたものが屠られて殺されたその結果、与えられたものであります。子羊が屠られてその皮がアダムとエバの裸を被ったわけです、隠したわけです、カバーしたわけです、^{あがな}買ったわけです。その皮の衣こそ勿論来たるべき義なるキリスト・イエスのことであります。ですから私たちはキリスト・イエスをその身に着ているんです。もう汚れた服ではなくて、もう決して咎められることのない、責められることのない、しみもシワも傷もそのようなものの何一つない義の衣を着せられているわけです。それゆえに私たちは**ヘブル 4:16**にあるように、**私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づくことが出来る**わけです。それゆえにであります。自分の行いでは所詮は汚れた着物です。汚れた衣服です。イチジクの葉っぱに過ぎません。でも、キリスト・イエスを着せられたのならば、義の衣を着せて頂いたならば、私たちは神の恵みの御座に大胆に近づくことが出来、おりにかなった助けを、ヘルプを受けることが出来ます。

この話も前に皆さんに何度もしておりますけれども、**聖霊は罪を断定し、神に私たちを近づけます。一方で悪魔は私たちの罪を断罪し、私たちを神から遠ざけます。**罪が示されて誰もが気持ちの悪い気分はしません。むしろ不快に思い、むしろ恥ずかしく思い、むしろそのような罪を示されることが嫌です。ところが同じ働きでも、聖霊は罪を示したならば私たちを救い主の元へと導いてくれます。「あなたは罪人である、あなたは汚れている、汚れている。だ

からあなたには義の衣が必要である。だからあなたは罪からの救いが必要である」と。これが聖霊の働きであります。一方で悪魔も同じように、言わば聖霊と同じように罪を示すことはします。でも、その罪の示し方は私たちを裁くものであり、断罪するものです。非難するものであって、そして私たちをより一層神から遠ざけるものであります。「お前はまた同じ罪を犯した。それでもクリスチャンか。絶対にあなたのやったことは許されない。あなたは神の前には相応しくない。神の前にそんな姿で立てると思うのか。」神から遠ざけます。「どのツラ下げて教会に行くつもりなのか。そんな罪を犯していて教会になんて行けるものか。偽善者だ。よくそれで聖書が読めるものだ。よくそれで困った時の神頼みなんか出来るものだ。お前には祈る資格などない。罪ある者はいくら祈ったって神には聞かれないんだ。」と、そういうことをサタンは囁いて、あなたを日夜訴えるわけです。覚えて下さい。聖霊は罪を断定し、あなたを神に近づけて下さいます。一方で悪魔は罪を断罪し、神からあなたを遠ざけようとします。それは大きな違いです。私たちは皆罪を犯します。しかし私たちには弁護して下さいの方がおられます。その方は義なるイエス・キリスト。そしてその方は、もう1人の助け主、パラクレイトスである聖霊を私たちに遣わして下さいました。聖霊が私たちの罪を示しますが、その時には私たちを神の方へと引き寄せてくれます、導き入れて下さいます。悪魔は私たちの罪を示して、断罪して、神から遠ざけて、引き離そうとします。大きな違いです。たとえばあなたが3時間祈らなくても、3週間祈らなくても、3ヶ月祈らなくても、3年も祈らなくても、あなたは神の前に立つことが出来ます。恵みの御座に大胆に近づいて、折にかなった助けを受けることが出来るんです。あなたの義ではないんです。あなたがどれだけ教会に通っているか、どれだけ聖書を読んでいるか、そんなことは一切関係ありません。憐れみを受けて、恵みを頂いて、私たちは神から一方的に愛されて、神の恵みの御座に大胆に近づくことが出来るんです。自分の義によって近づこうとしてはいけません。「これだけ献金をしたから、神に助けてもらおう。見合ったものを頂けるに違いない。相応しいものをもらえるに違いない。祝福が与えられる。問題の解決が与えられる。これだけ苦行を積んだから、修行したから、だから私の祈りには、願いには応えてもらえるに違いない。」それは間違いです。それは律法主義であります。どんな罪でも赦して頂けます。ただし、聖霊を汚す罪、又は聖霊を冒瀆する罪は決して赦されず、とこしえの罪に定められます。それは、キリストを信じないという冒瀆する罪。救い主を拒否するという冒瀆する罪であります。唯一の救いの方法を、解決法をあなたが拒否してしまえば、それ以外に、それ以上に救いの道は無いわけですから、あなたは必然的にとこしえに赦されない罪に定められてしまいます。それ以外の罪ならばどんな罪でも赦して頂けますから、恐れなくて下さい。心配しないで下さい。どんな罪でもキリストの血潮にすがって、憐れみを受けて、恵みを頂いて、折にかなった助けを受けて欲しいと思います。聖霊があなたに罪を示しても、聖霊はあなたを救い主の元へと必ず導いて下さいます。

で、テキストに戻って頂きたいと思いますが、**第一ヨハネ 2:3**に目を移して下さい。『もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。』神の光の中を歩むならば、神と交わりを持つならば、キリストを個人的に人格的に体験しているならば、こういう証しが必ず見られますよと。または言い換えれば「どうやったらキリストの現実を人格的に個人的に体験しているのだと分かるのでしょうか。見分けることが出来るのでしょうか。」その見分け方について、この**3節**以降に書いてあります。ここでキーワードも使われていますから、そこにも注目して下さい。「それによって」の後に『私たちは神を知っていることがわかります。』そのキーワードとは“知る”という言葉と“わかる”という言葉。日本語では言い換えておりますけれども、原語は同じであります。“知る”も“わかる”も同じ原語がここでは使われております。それは皆さんもよく知っている「ギノスコ」"ginosko"という言葉です。意味は「**経験的に知る**」という言葉です。「ただ知る。ただ分かる。」ではなくて、「**経験的に知る**。」情報知識として知るのではなくて、実際に経験したから分かるようなと、そういう言葉です。ただ名前を知っている、というだけではなくて、実際にその人と会って話して、その人の人となりも全部分かっている。そういうレベルでの知り方。親密な知り方です。旧約聖書でよく使われている、「アダムがエバを知る」とかいうときに使う言葉と同じです。アダムがエバを知るとは、ただ知り合ったという意味ではなくて、夫婦として性的結合を体験したということです。夫婦としてセックスをしたということ、それが知るということです。そのような人格的な親密なレベルでの知り方、それが「ギノスコ

ー」というギリシャ語であります。神をあなたは経験的に、体験的に知っているのでしょうか。「そのことがどうやって分かるのでしょうか。どうやって見分けることができるのでしょうか。」というのがここからの話になります。ちょうどこの「ギノスコー」という言葉は、3 節から使われておりまして、4 節、5 節、13 節、14 節、18 節、そして 29 節に使われております。ふんだんに使われていますからキーワードであります。自分で見れば分かります。知るとか、分かる、という言葉がその「ギノスコー」に当たりますので、見て頂ければ確認出来ます。沢山使われていることに、もうお気づきになっていると思います。ですからそれをキーワードに、すなわちそれは「経験的に知る」ということです。「知覚的に知る」ではありません。「経験的に知る」です。「体験的に知る」というレベルの知識です。頭の知識ではなくて、心の知識であります。

で、4 節の方も見て下さい。『**神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにはありません。**』3 節と 4 節の繋がりを見て頂きたいと思うのですが、もしあなたがキリストの現実を個人的に体験しているならば、あなたは間違いなく神の命令を守っているはずである。それによって分かるんだと。神を知っていると言いながら、神を人格的に個人的に体験的に知っていると言いながら、ギノスコーと言いながら、その命令を守らない者は偽り者である。嘘つきだと言っているんです。偽善者だと言っています。真理はその人のうちにはありません。「**私は道であり、真理であり、命です**」と。真理はイエス・キリストと言い換えても差し支えないと思います。神を知っていると言いながら、神の命令を守らなければ、又は御言葉に従わなければ、その人のうちには真理であるイエス・キリストはおられない。もっと言ってしまうと、救われていないと。クリスチャンでもないと言っているわけです。神の命令を守らないならば、聖書の言葉に従わないならば、その者は自称クリスチャン、名ばかりのクリスチャン、偽クリスチャンだと言っているわけです。ハッキリ偽り者、嘘つきだと言っています。クリスチャンぼくでも、洗礼を受けていても、教会に通っている教会員だったとしても、信仰歴が何十年と自称する者であったとしても、神の命令を守らなければ、神の言葉に聞き従っていないならば、その者は偽り者である。

で、続きを見て欲しいと思いますが 5 節。『**しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。**』さらに御言葉を実践しているならば、実行しているならば、その人のうちには神の愛が全うされている。神の愛が、言い換えれば、実践されている、実行されているということです。ただ機械的に神の命令に聞き従うのではなくて、それは神を愛するという思いから出ているということです。その人のうちには神を愛するハートが見られると言っているわけです。

で、6 節に『**神のうちにとどまっていると言う者は、(要するにクリスチャンと名乗る者は)自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。**』ここでも同じことが繰り返されています。様々なフレーズが使われて、ボキャブラリーが使われて、ニュアンスが違ってても、本質的には実質同じことを言っています。御言葉を守る。神の愛を全うする。それは神のうちに留まることで、キリストが歩まれたように歩むということでもあります。キリストのように生きている者は、間違いなくクリスチャンであると。なぜならば、キリストは神の御言葉を守り行い、そして神を愛し、そして神のうちに留まり続けたからであります。

7 節を見て下さい。『**愛する者たち。私はあなたがたに新しい命令を書いているのではありません。むしろ、これはあなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いている、みことばのことです。**』決して難しく考えてはいけません。私はあなたがたに新しい命令、新しいルールを与えたいのではないんだと。これはもう昔からあなたがたが聞いている古い命令であると。

で、8 節を見て下さい。『**しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。**』何か矛盾したことを言っています。7 節では「**あなたがたに新しい命令を書いているのではありません**」と。「**むしろこれはあなたがたが初めから聞いている古い命令である。**」と言いながら、8 節では「**しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。**」全然言っていることがガラッと変わってしまっていて、矛盾しているんじゃないですかと思うかもしれませんが。これを書いているのは 100 歳近い長老のヨハネですから、もうろくしたんじゃないかと。勿論そうではありません。ここでは、新しい命令と言われているのは勿論矛盾ではなくて、この「**新しい**」という言葉のニュアンスは、むしろ「**新鮮**」という意味で

す。古い命令ではあるんですけども、これはフレッシュな、新鮮な教えであると。古い教えも、その教えを実行するならば、常に新しい、新鮮な、フレッシュなものとなっていく。古い教えを実践しなければ、古いままで古びていくわけです。ですから今、あなたがたにはリフレッシュしてもらいたい。それがヨハネのハートです。リフレッシュしてもらいたい。新鮮な思いになってもらいたい。

で、9～11 節に『⁹光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。¹⁰兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまづくことはありません。¹¹兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩んでいるのであって、自分がどこへ行くのか知らないのです。やみが彼の目を見えなくしたからです。』ヨハネが言っている新しい命令、それは初めから聞いている古い命令でもあったわけですけども、それは聖書の中で最も大切な、最も偉大な命令であります。もう皆さん分かっていると思いますけれども、それは申命記 6 章にも記録されている『シエマの朗誦』と呼ばれるもの。「聞きなさい、イスラエル。」シエマです。ヘブル語で言います。『シエマの朗誦』それは申命記 6 章 5 節以降に出てくる言葉ですけども、新約聖書の中にも使われております。マタイの福音書 22:36～40。そこでイエスが引用しています。『³⁶「先生。律法の中で、たいせつな戒めはどれですか。」(と律法の専門家がイエスを試そうとして質問しました。)³⁷そこで、イエスは彼に言われた。(これがシエマの朗誦です。)]『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』³⁸これがたいせつな第一の戒めです。³⁹『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。⁴⁰律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。』と、40 節までお読みしました。またルカの福音書 10:25～28 にもこのシエマの朗誦が引用されています。今度は逆にイエスが律法学者に対して質問しているんです。これはまったく別の場面ですけども、ルカの福音書 10:25～28 に『²⁵すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスをためそうとして言った。「先生。何をしたら永遠のいのちを自分のものとして受けることができるでしょうか。」²⁶イエスは言われた。(逆に今度は質問しています。)]「律法には、何と書いてありますか。あなたはどの朗誦を聞いていますか。」²⁷すると彼は答えて言った。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』とあります。』²⁸イエスは言われた。「そのとおりです。それを実行しなさい。そうすれば、いのちを得ます。』なぜこの箇所をわざわざマタイとルカと両方読んだのかと言いますと、マタイ 22 章では、イエスはシエマの朗誦を引用して、これが昔から聞いている古い戒めであり、これが一番大切な戒めであると言いました。で、ルカ 10 章でも律法の専門家がイエスと同じことを言いました。実際にシエマの朗誦を引用したわけです。イエスと同じことを言っています。でも、この両者には大きな違いがありました。その違いとは、イエスはこのシエマの朗誦を、全身全霊をもって神を愛するというその大切な戒め、また隣人を自分自身のように愛しなさいというその戒めを、イエスは実行していたわけです。その一方で、律法の専門家は知ってはいました。知識としては聖書のエキスパートですから「どれが一番大事な戒めですか。」と言われれば、即座に答えることが出来たんです。いくらでも聖句を暗誦していて引用も出来たわけです。ところが彼はその御言葉を知っているだけで、実行はしていなかったわけです。それが大きな違いです。ヨハネも「あなた方は一番大切な戒めを知っているはずだ。『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。』それは昔から聞いている話。あなたも分かっているでしょう。でも、それでは不十分である。頭の知識だけでは不十分である。それを心の知識としてあなたは文字通り実行に移しなさい。そうすればそれは新しいものとなる。」イエス・キリストはヨハネの 13 章において弟子たちに言いました。「わたしはあなた方に新しい戒めを与えましょう」と。「わたしがあなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい」と。昔から聞いているんですけども、イエスが愛したように、イエスが実行されたように、あなた方も互いにシエマの朗誦を実行しなさい、と言っているわけです。そうすればそれはあなたのうちに新しいもの、新鮮なもの、フレッシュなものとなり、あなたを今一度リフレッシュするものとなると。

第一ヨハネの手紙、テキストに戻って頂いて、ですからここでは、兄弟を愛すること、それが昔から聞いている古い命令であって、同時にそれは新しい新鮮なフレッシュな命令でもあるということです。もしあなたが兄弟に対して憎

しみを抱いているならば、ムカついているならば、苦々しい思いを持っているならば、嫌悪感を持っているならば、あなたは間違いなく闇の中にいて、あなたはどこへ向かって行くのかも知らない、盲目な人と同じだと言っているわけです。兄弟に対して憎しみを抱いているならば、その者は間違いなく光の中ではなくて、闇の中におります。その目は見えなくて、あなたは今どこへ向かっているのかも分かっていない者だと言っているわけです。

それは盲人が真夜中に懐中電灯をぶら下げながら歩くようなものです。どういうことか分かりますか。勿論目が見えないわけですから、彼にとって昼も夜もないわけです。常に夜のわけです。どうして目の見えない人が、夜、懐中電灯をぶら下げて歩くのでしょうか。滑稽でしか思えません。しかし、よく考えてみて下さい。ちゃんと理由があるわけです。盲人は勿論懐中電灯は必要ありません。でも、もしかしたら自分のことが見えなくて、自分にぶつかってしまう人があるかもしれない。又は自分が見えなくて、車であれば轢いてしまうかもしれない。兄弟につまづきを与えたくない。それが愛であります。

ここに、**10 節**を見て下さい。『兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまづくことはありません。』愛というものは常に他者を気遣うものです。自分以外の他者を自分以上に気遣う、ケアする者。それが愛です。それが聖書で言う愛、アガペーの愛、神の愛であります。愛というのは常に他者に焦点を当てるものです。フォーカスを置くんです。自分にフォーカスを置くのではなくて、自分に焦点を当てるのではなくて、自分にスポットライトを当てるのではなくて、他者に焦点を当てる。他者にフォーカスを置く。他者にスポットライトを当てるわけです。愛というものは常に他者の最善を願うものです。他者に、あの人にとってベストなもの。私にとってベスト、私にとってメリットがある、ではなくて。あの人にとって最善、最高のもの。あの人にとってベスト、メリットのあるもの。それを欲する、それを願うことが愛であります。それがアガペーの愛であります。そのためには喜んで自分を犠牲にします。一言で言えば、自己中心ではなくて、他者中心の愛です。それが神の愛です。それが、キリストが示された愛です。十字架上のイエス・キリストは、自分のことなど全く考えていませんでした。イエスの頭にあったのは、心にあったのは、私やあなたのことです。イエスは私たちのために、自分を十字架に磔にしたようなおぞましい極悪人である私たちのために、十字架の上で、あの激痛の中で祈って下さったんです。苦しい時に他人のために祈るなんていうことが出来るでしょうか。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」他者中心でした。他者のことを、私たちのことを、罪人のことすら気遣ってケアしてくれたいんです。私たちが滅びないように。私たちのベストを考えてくれたわけです。滅びないで永遠の命を持つことが出来るように。それが神の愛であります。ですからイエスはあの十字架の苦しみすら耐え忍ぶことが出来たわけです。ヘブル **12:2** にこういう言葉があります。『信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、（ご自分の前に置かれた喜びとは、あなたのことです。あなたが喜びだったんです。あなたのゆえに）はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。』愛は常に他者中心です。他者を気遣いケアします。愛は他者に焦点を当てます、フォーカスを当てます。愛は他者の最善を常に求めます。十字架の上でもあなたが喜びだったんです。あなたのために耐え忍ぶことが出来ました。兄弟を愛する者は、光の中にいますから、闇の者ではありませんから、つまづくことはありません。または、別訳でそこは『つまづかせることはない』とあります。「つまづく」というのはギリシャ語では「スカンダロン」"skandalon"と言います。英語の「スキャンダル」の語源でもあります。この「スカンダロン」という言葉は元々は「罨を仕掛ける」という言葉です。ですから兄弟を愛するならば、私たちは罪に陥らせるところの罨に引っかかることはありません。または、兄弟を愛するならば他人を罪に陥らせるような罨を仕掛けることはない。これが「つまづかせることがない」ということです。これが「つまづくことがない」という意味です。兄弟を愛してるならば、あなたは罪を犯すことがないんです。**第一ヨハネ 2:1** でも『罪を犯さないようになるため。』兄弟を愛するならば、あなたは光の中に留まりますから、罪に陥るような罨には引っかかりませんし、あなたは兄弟をつまづかせること、すなわち兄弟に罪を犯させるような罨を仕掛けること、つまづきを与えることはない、と言っているわけです。でも逆に、あなたが兄弟を憎むならば、あなた自身も罨にかかって罪を犯します。で、同時に周囲の人たちも罪にあなたは陥らせる、つまづきを与えることにもなります。

テキストに戻って頂いて、では兄弟とは一体誰ですか。これは先程読んだところにも、「隣人とは一体誰ですか。私の隣人とは一体誰ですか。」ルカ 10 章のところに律法の専門家がイエスにチャレンジしました。ルカ 10 章はその後に続く話として有名な良きサマリヤ人の物語。これは例え話ではなくて、これは実話だったと思われま。あなたの隣人はこの人だという教えです。それが良きサマリヤ人の物語であります。律法の専門家がイエスにチャレンジして、イエスを試すようにして、「私の隣人とは一体誰のことですか。教えて下さい」と。良きサマリヤ人の隣人、それは、本来は付き合いのなかった、犬猿の仲となっていた、敵ともなっていたユダヤ人です。このユダヤ人は強盗に襲われて、見捨てられて瀕死の状態でした。そのユダヤ人に、本来付き合いもなかったサマリヤ人がケアをして、傷に包帯を巻いて、そして宿屋まで連れて行って、宿賃まで払って完全に回復するまで全部自分が自腹でそのユダヤ人のために憐れみを示したわけです。その憐れみをかけたその人こそあなたの隣人である。あなたの隣にいる人です。通りかかった時に目に入ってくる人たち、近くにいる人、すべてが隣人です。ここでは、ヨハネの手紙の中では、兄弟というのは特に主ある兄弟姉妹の兄弟、クリスチャンのことを第一義的に指しますけれども、すべての兄弟、隣人というふうにも見て良いと思います。第一義的には兄弟といえばクリスチャンですけども、だれでも私たちの兄弟姉妹になります。あなたが良いサマリヤ人であるならば、たとえ付き合いのない者でも、たとえ自分とは全然考えが違った者たちであったとしても、それでも憐れみを示してあげること、愛するという。もしあなたが兄弟に対して、隣人に対して、怒りを抱いて、憎しみを抱いて、苦々しい思いを抱いているならば、それは問題であります。あなたは光の中にはおりません。何かがおかしいと思って下さい。あなたの隣の人、前の人、後ろの人、ここにいない人たちに対して、あなたが苦々しい思いを持っているならば、嫌悪感を持っているならば、怒りを持っているならば、何かがおかしいと思って下さい。何か間違っていると思って下さい。それは正しい、健全な状態ではありません。それは光の中に留まっているとは言い難いものです。ガラテヤ 5:22 にもそこには御霊の実についてあります。御霊の実は愛です。愛です。兄弟を愛していなければ、あなたは勿論御霊の実を結んでいないということになります。御霊に従っていない、御言葉に従っていない。霊的ではないということです。私たちはまことに救われた者、まことにクリスチャンとなって光の中に今浴^{いま}することが許されている者であるならば、誰かに対して怒りを抱く必要性はないんです。誰かに対して憎しみや苦々しさを抱くという、もう必要性がないんです。誰かを怒るという権利ももうないんです。私たちは神の怒りを受けて、本来であれば永遠の滅びに至っていても不思議ではない。地獄に落ちていて不思議ではなかったわけです。その神の怒りの対象であった私たちが、なだめの供え物であるイエス・キリストによって、十字架のあの贖いの死によって私たちは怒りの対象ではなくなり、神の子どもとされたんです。光の子どもとされたんです。ですから私たちはもはや誰かに対して怒りを抱く、憎しみを抱く、苦々しさを抱くという必要性もそうですが、権利すらないはずなんです。「あの人はあんなことを言った。こんなことをやった。私にこんな仕打ちをした。だから許せないんです。だからムカつくんです。だから嫌なんです。嫌いなんです。口も利きたくない。会いたくもない。」もしあなたがそういう思いを誰かに抱いているならば、あなたは間違いなく光の中にはおりません。何かがおかしいわけです。もし、あなたがクリスチャンとして明るくないならば、明るく楽しく輝いているクリスチャンでないならば、間違っています。どこかがおかしいです。あなたは、明るく楽しく輝いて、人を憎むことは出来ません。ニコニコしながら人を憎むことは出来ません。ゲラゲラ笑いながら、楽しみながら人を憎んだら、ちょっと頭がおかしいかもしれません。実際のところ、もし私たちが光の中に留まっているならば、私たちは人に対して怒りを抱いたり、憎しみを抱いたり、苦々しさを抱くということは、これはあり得ないことです。ナンセンスなこと。あるとしたらそれは奇妙なことで、あってはならないことで、異常なことであるわけです。クリスチャンとしてそれは異常なこと。クリスチャンが兄弟を憎む。これは異常なこと。気持ちの悪いことです。明るくないクリスチャンなど本来は存在しないんです。それが事実ならばあなたは光の中にいないということ。ただそれを物語っているだけであります。

で、次にテキストの 12 ~14 節。『子どもたちよ。』とあります。ここから神の家族の構成について見る事が出来ます。神の家族のポジションと言っても良いと思いますし、クリスチャン・ライフのステージ、ライフ・ステージとみて良いと思います。クリスチャンの霊的な成長段階というものもこの中に見ることが出来ます。神の家族の中には子供がい

ます。そして父もおります。若い者もおります。神の家族のポジションがここに出て来ておりますし、それぞれがクリスチャンの成長における段階を表しています。ライフ・ステージを表しております。この世のライフ・ステージといえば、子供と若者と大人と老人。まあ、幼児、児童、青年、成人、そして高齢者と、大体 4 つにそのライフ・ステージがだまかに分けられるわけです。ヨハネによれば、聖書的には、クリスチャンのライフ・ステージは 3 つあるとあります。そのうちの 1 つが 12 節の『子どもたちよ。』そしてもう一つが 14 節に見られる『若い者たち。』そしてもう一つが 3 日目として『父たちよ。』この 3 つのステージが、クリスチャン・ライフには見られます。この 3 つのステージがクリスチャンの信仰の成長段階をそれぞれ表しております。この 3 つのグループ、カテゴリーが神の家族の中に常に見られます。

で、まず『子どもたちよ。』という言葉が 12 節にありますけれども、これは 2 章 1 節のところにも使われている言葉です。『私の子どもたち。』さらに 14 節のところを見ていただくと『小さい者たちよ。』とあります。“子どもたちよ”と“小さい者たちよ”、これは訳も違いますけれども原語も勿論違います。“子どもたちよ”の方は「テクニオン」"teknion"と言います。それは「子ども」と訳される言葉ですが、“小さい者たちよ”これは「パイディオン」"paidion"という言葉です。意味は勿論「小さい」という意味ですけども、特に「幼児」です。子供と小さい者、原語は違うんですが、これは 1 つのカテゴリーに含めていいと思います。要するに、幼児と児童の子供という意味です。

12 節『子どもたちよ。私があなたがたに書き送るのは、主の御名によって、あなたがたの罪が赦されたからです。』子供たちは、霊的な幼児・児童は、キリストの御名によって自分の罪が赦されたことを知る者たち、経験している者たちのことであります。「すべての罪は赦された。もう罪責感に苛まれることはない。もう過去に縛られることはない。」開放感があります。

で、14 節のところに『小さい者たちよ。私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが御父を知ったからです。』キリストにある小さい者たち、幼児は、御父・父なる神を知っているのだ。神は愛である。知っています。神は義なる方。知っています。神は実にそのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。知っています。それが小さい者たち、または子供たちです。それが霊的な幼児・児童の姿であります。罪が赦されたことを知っている。そして父なる神の性質・属性を知っているわけです。でも、そこで留まってはなりません。これは成長段階ですから、そこからステップ・アップしていく、ムーブ・オンをしていく必要があります。

『若い者たちよ。』13 節。先に『父たちよ。』と、ありますけれども、その前に若い者たちを見て下さい。『若い者たちよ。私があなたがたに書き送るのは、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。』キリストにある青年は、若者は、悪い者に打ち勝つという霊的な戦いにおける勝利を経験する者たちのことであります。頼もしいです。霊の戦いにおいて私たちの敵であるサタンサタンの誘惑や攻撃において、しっかりと勝利していく。それは御言葉によってであります。14 節のところも見て下さい。やっぱり真ん中あたりに『若い者たちよ。』とあります。『私があなたがたに書いて来たのは、あなたがたが強い者であり、』もう幼児や児童のような弱い者ではなくて、あなたはもう青年として強い者となった。『神のみことばが、あなたがたのうちにとどまり、そして、あなたがたが悪い者に打ち勝ったからです。』と。素晴らしいです。神の御言葉によって敵対者サタンサタンに対して、誘惑者に対して、中傷する者に対して打ち勝つことが出来る。御言葉によって果敢にサタンサタンに立ち向かい、そして神の御国を拡大するというそうした働きに積極的に関わっていくんだと。この御言葉によって勝利していくというポイントに是非着目して頂きたいと思います。イエス・キリストもサタンの誘惑に遭った時には、御言葉を用いて撃退しました。御言葉を引用したわけです。ただ、多くの人が誤解しております。聖句さえ引用すれば、サタンの誘惑に打ち勝つことが出来る、サタンを撃退出来ると思っている人がいるかと思えます。聖句さえ引用すれば良いのではなくて、よくよくイエスがどのように対応されたのか、対処されたのかを、例えばマタイの福音書 4 章にその記録がありますけれども、そこをつぶさに見ていただくとイエスはただ御言葉を引用しただけではなくて、御言葉を実行したわけです。御言葉を引用すればサタンを撃退出来ると思ったら大間違いです。実のところサタンも御言葉を引用出来るんです。御言葉を覚えて暗誦して、ただ諳んじれば、それで誘惑に打ち勝てるかと思ったら大間違いです。そうではなくて、イエスは御言葉を引用しただけではなくて、そこに留まらずに御言葉を実行したわけです。御言葉に従ったわけです。その結果、悪魔は撃退されて、イエスの前から逃げ去っ

て行ったわけです。尻尾を巻いて逃げて行ったわけです。ですから勘違いしないで下さい。誤解しないで下さい。御言葉を引用するだけでは十分ではありません。御言葉を暗誦する、誦んじるだけでは十分ではありません。御言葉に聞き従わなければ、サタンは何の脅威も覚えません。サタンですら御言葉を引用出来るわけですから。違いは、あなたは御言葉を守ることが出来るということです。御言葉を実行出来るということです。それはサタンにとっては恐れになります。脅威になります。サタンは、御言葉に従うあなたの前にはとても立ち得ません。御言葉を実行するあなたをそれ以上誘惑出来ないからです。撃退されてしまうわけです。ですから、是非御言葉をただ暗誦するだけではなくて、引用するだけではなくて、実行して、強い者としてサタンの誘惑に負けてばかりないで打ち勝って欲しいと思います。

ある人たちは御言葉に聞き従うことを嫌います。例えば、聖書では同性愛というものは罪だと言われています。同性愛は罪であると聖書は明言しています。でも、聖書に聞き従いたくないので、「今日は同性愛は、これは生まれつきの性質であって、同性愛者もまた男と女そうした人たちと同じように権利を与えられるべきである。同性愛の結婚も認めるべきである。社会的な地位も与えるべきである。同性愛はもはや罪ではないんだ。それは古い人の考えである。」教会の中ですらそういう考えがはびこっております。「同性愛は生まれつきだから。そういう性質、そういう傾向がもう生まれた時からその人に組み込まれているんだから仕方がないです。それはむしろ認めてあげるべき、受け入れてあげるべきです。」という主張であります。ところがそれを言い出すと、ある人は「私は生まれながらに盗癖があります。人のものを見るとすぐに盗んでしまうんです。すぐに万引きするんです。仕方がないです。これは生まれつきの私の盗癖ですから。私は生まれつき嘘つきなんです。すぐ人に嘘をつきます。」同じ論法でいけば「それもまた生まれつきの性質ですから、万引きしたって大目に見てあげなさいよ。仕方がないですよ。だって盗み癖がもう幼い頃からついているんですから。詐欺をされても、オレオレ詐欺だって仕方がないですよ。許してあげなさいよ。何千万円取られたってそれは仕方がないです。だってその人には嘘つきというその性質が最初から組み込まれているわけですから。テロリスト、許してあげなさいよ。通り魔、許してあげなさいよ。その人は生まれつき人を殺したいという衝動に駆られるんです。レイプ魔を許してあげなさい。その人は生まれつきそういう性的倒錯の性癖があるから、許してあげなさい。」言いだせばそれはキリがないことであり、言いだせばそれは完全に狂気の沙汰となってしまいます。ですから、同性愛も聖書はハッキリ罪であると言っています。勿論それらの罪はイエス・キリストの血潮によって完全に洗い清められ、赦して頂けます。ただ、誤解してはいけません。聖書は、同性愛は罪だと言っていますから、それを行えばどうなるのか。神の国を相続出来ませんと聖書には書いてあります。**第一コリント 6:9～10** にこう書いてあります。『**9** あなたがたは、正しくない者は神の国を相続できないことを、知らないのですか。(言い換えれば天国には入れませんと。) **だ**まされてはいけません。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者(これらが同性愛の罪です。)、**10** 盗む者、食欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者はみな、神の国を相続することができません。』これが、御言葉が言明していることです。同性愛の罪だけではなく、同列の罪としていろんなものが挙げられています。「それらの罪は生まれつきの性質ですから、大目に見て下さい。仕方がありません。受け入れてあげましょう。」では通用しません。それらの罪を犯している間は、神の国を相続出来ない。ただ **11** 節を見て下さい。『**あなたがたの中のある人たちは以前はそのような者でした。(コリントの教会の中のある人たちは、不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、元同性愛者もいたわけです。盗む者もあれば、食欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者もかつてはそういう者たちがいたわけですが、彼らは)しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって(そんな罪人の汚れた彼らも洗われ)、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。』と。「生まれつきの性質だから、傾向だから仕方がありません。これは心の病ですから仕方がありません。そういう育てられ方をしたから、そういう環境で育ったから仕方がありません。そういう病気だから仕方がありません。」ではないんです。すべて聖書で罪と言われているものは、罪です。で、罪に陥っているならば、罪を犯し続けるならば、その者は聖書の言う通り、神の国を相続出来ません。**

ただし、もしそのような生まれつきの傾向と呼ばれてしまって、どうにもならず縛られて、その罪の中に溺れてし

まっている人でも、イエス・キリストに出会うならば、イエス・キリストはそのすべての罪を洗い清めてくれます。すべての悪からあなたを救い出してくれます。どんな罪からも解放されます。あなたが御言葉に従うならば、あきらめていたその罪の傾向も性質もすべて変えられます、解放されます。あなたが御言葉に従うならば、誘惑者はあなたから逃げ去っていきます。御言葉に聞き従わずに、自分の罪を正当化するならば、罪を罪と認めないならば、言い訳ばかりするならば、あなたはいつまでも罪の中に留まり、罪の中に最後には死んでいくようになります。でも、御言葉に聞き従うならば、「御言葉で罪は、罪だ。」として言い表すならば、「ホモロゲオー」という言葉を前回紹介しましたが、「同じことを言う」。聖書で罪と言っているならば、私も同じことを言う。同性愛は罪である。だからこれは生まれつきの傾向であろうと、生まれつき小さい頃から男だけれども化粧をしたり、女の子の格好をすることに憧れを持っていること、仕方がないではありません。それは罪になっていきますので、ですからそれを罪として認めるならば、そのような傾向から、そのような有りとあらゆる性癖から解放されて、そして変えられていきます。どんな罪であろうと、どんな性質であろうと、あなたは変えられて、そして勝利します。

テキストに戻って頂いて**第一ヨハネ 2:13**に今度は『父たちよ。』とあります。**14節**にも『父たちよ。』とあります。『父たちよ。私があるがたに書き送るのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。』と、**13節**にあります。**14節**にも『父たちよ。私があるがたに書いて来たのは、あなたがたが、初めからおられる方を、知ったからです。』と、全く同じ言葉が2度も繰り返されています。しつこいようですけれども、『初めからおられる方』とは、勿論イエス・キリストのことです。ヨハネの福音書**1:1**に『初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。』初めからおられる方とは、イエス・キリストのことです。初めからおられる方イエス・キリストを知ったからですと、父たちに対しては同じことが2度繰り返されていますけれども、これはクリスチャン・ライフの成長段階を表している、ライフ・ステージを表していると言いました。子どもたち・小さい者たちから、霊的な幼児・児童から霊的な青年たち・若い者たちに移行して、最後には父たちのレベル、霊的に成熟した者へと成長して行くわけですが、そうなってくるとだんだんすべてが簡素化していきます。全てがシンプルになってくるのです。よりシンプルに。成長すればするほど、成熟すればするほど、だんだんシンプルになってきます。ですから、最後にもう100歳を超えた長老のヨハネは、集会でゲストスピーカーとして呼ばれれば、一言だけ「子供たちよ、互いに愛し合いなさい」と。続きがあると思ったらそれで終わって、講壇から降りてしまう。そういうことが実際に伝承に残っております。いずれにしても霊的に成長すれば、だんだんシンプルになってくるんです。で、そのシンプルになってくるのは、もうその人にとっての情熱は、関心事は、たくさんこれまではあったけれども、もう1つしかない。1つに絞られていくということです。あれもこれもから、たった1つのことだけ。それは、初めからおられる方イエス・キリストのみです。最後にはイエス・キリストのみ。その方以外にもう知る必要もない。その方を知っていれば、もう充分である、という段階に至っていきます。

これについてはパウロという人も同じことを言っています。**第一コリント 1:23**『しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。』と言った後に、**2章 2節**『なぜなら私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のほかは、何も知らないことに決心したからです。』父たちよ。あなた方は初めからおられる方を知ったからです。成熟してくると、もうイエス・キリストのことだけ。それ以外のことはもう必要ないと。ますますシンプルに、より簡素化してくるわけです。単純化してくるわけです。罪赦されることも知って素晴らしい体験となります。父なる神の属性・性質を知ることも素晴らしい体験になります。御言葉によって霊的な戦いにおける勝利を味わうのも、これもスリリングな体験であります。でも、それら全て、成熟してくるともう1つに集約されてきます。イエス・キリストのみ。「私の情熱はたった1つ。私の関心事はたった1つ。イエス・キリストのみです」と。「イエス・キリストが私のすべてのすべて。キリストが私の命そのものです」と。ミニストリーだとか、神学だとか、またクリスチャンの証しだとか、職場における成功、家族における成功、いろいろなことが、私たちは関心事としてありますし、それらにも心を砕いていくものであります。でも最後には、最終的には、もうイエス・キリストのみです。キリストを経験的に、人格的に知ること。それ以上の体験は他には無いからです。キリストを親密なレベルで知っていくこと。クリスチャン・ライフというのはそのように成長するにつれてだんだんシンプルになっていきます。簡略化していきます。簡素化していきます。

単純化していくのです。イエス・キリストがすべてというのが、成熟した人の印であります。「キリストも素晴らしいけれども、あれもこれも。」というのは、まだまだ未熟な証拠であります。キリストがすべて。キリスト以外にもう知りたいとも思わない。それが成熟した者の印。それが父たちの姿であります。

で、父となると必然的に新しい命を生み出すようになります。幼児や子供たちは新しい命はまだまだ生み出せません。でも、父たちになってくると、そのレベルに達すると、父は子供を生むようになります。新しい命を生み出すようになります。霊的に成熟した者たちは、イエス・キリストが全てとなっている者たちは、新しい命を生み出します。そういう人たちの姿は誰の目にも魅力的です。キリストが全てだという人の生き方を見て下さい。理想的です。何があっても動じない。平安がある。喜びに溢れている。そして人を愛する。キリストが愛されたように人を愛するようになる。そんな姿を目にすると「素晴らしいなあ、あの人のようになりたいなあ。」と、新しい命が生まれてきます。

ここにいる皆さんは今どのステージに自分があるとお思いでしょうか。子供たち・小さい者たち、霊的に幼児・児童でありましょうか。キリストの名によって罪が赦されたことは知っていますと。また、父を知るようになりました。神様ほどのような方か分かるようになりました。

または、あなたは若い者たちでしょうか。霊的な戦いにおいて御言葉による勝利を今体験しているでしょうか。果敢に悪魔に立ち向かい、果敢に神の御国の建設に携わっているでしょうか。サタンを支配を、サタンのテリトリーを奪還して、キリストの御国を拡大するような、そんな第一線で働くような強い者となっているでしょうか。

それとも、あなたは父たちのレベルに達しているでしょうか。初めからおられる方、イエス・キリストを知っていることの喜びに満ち溢れているでしょうか。「もうイエス・キリスト以外には何も要らない。キリストが私の全てだ」と。すべてのすべてとなっている。

子供や小さい者であるならば、それも素晴らしいことです。皆さんが子供であるならば、小さい者であるならば、素晴らしいことです。祝うべきことです。でも、それではもったいない話です。そこで留まってはなりません。あなたは若い者にもなれるんです。成長出来るんです。キリストにある青年として果敢に戦うことが出来るんです。勝利を味わえるんです。もっと素晴らしいです。ただ、そこで留まってもいけません。さらに素晴らしいことが、父のレベルに達するということです。成熟するということです。キリストこそが命になるということです。全ての全てとなるということです。イエスを愛し、イエスご自身を喜び楽しむ。それが父たちの日々であります。あなたはどのステージに今自分があるとお思いでしょうか。

で、15節を見て下さい。『世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。』ここからは全家族に対して語っています。子供にも、小さい者にも、若い者にも、父たちにも。全家族に対して語っています。『世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。』「ちょっと待って下さい。ヨハネ 3:16 には『神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。』と書いてあるじゃないですか。でも、ここでは『世をも、世にあるものをも、愛してはならない』と。一体どういうことですか。矛盾じゃないですか。」と、思う人もあると思いますが、**第一ヨハネ**の中で言われている「世」というのは、この世のシステムのことです。すなわち、この世の制度、この世の体制のことです。サタンを頭とした、この世の神であるサタン、この世の支配者とも呼ばれるサタンを頭とした敵対組織です。キリストを拒絶する罪の世界のことを、「この世」と言っているわけです。その『世』を、またその『世にあるもの』をもあなたは愛してはならないと言っています。この世の考え方、この世の価値観、この世の哲学、この世のメンタリティ、この世の流行、そうしたものを愛してはならない。サタンを愛してはならないとも言っていると思います。

16～17節にも目を留めて下さい。『¹⁶すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。¹⁷世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。』サタンには3つの戦略しかありません。たった3つしかない、しょぼいものしかないと言って良いと思います。**第二コリント 2:11**には、そこには『私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。』とあります。サタンの策略は知らされております。で、ここではサタンの策略・戦略はたった3つしか

いとあります。その3つとは今読みました16節の『肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢』この3つしかないんです。サタンをこの3つの戦略を持って私たちに誘惑を仕掛けてきます。攻撃を仕掛けてくるわけです。ただ、言い方を変えれば、この3つ以外の戦略は持ち合わせていないということです。ですから、しょぼいのです。ただ、勿論巧妙に仕掛けてきますけれども、でもいつでも見分けることが出来ます。『肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢』という戦略を持って、このうちのどれか、または複合的に用いて私たちに誘惑します。“欲”とありますけれども、欲求自体が悪いわけではありません。食欲だとか、睡眠欲だとか、性欲だとか、その欲自体が悪いわけではありません。それを誤解しないで下さい。そうではなくて、その欲求が自分だけを満たすものであるならば、それは悪い欲求ということです。それは罪だ、と言っているわけです。それは食欲だ、と言っているわけです。『肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢』

まず『肉の欲』という第一の戦略から簡単に説明しますと、それは御霊によらない人の欲のことであります。肉欲という事です。ガラテヤ5章にも「肉の行いは明白である。」というところで、リストアップされています。肉の欲にもよるもので、同時に御霊の実についてもガラテヤ5章には、コントラストのようにして、対比させられて描かれています。パウロは第一コリント9:27でこの肉の欲に対して対抗手段をそこに記しております。『私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。』と。肉の欲に対してパウロは、『自分のからだを打ちたたいて従わせます。』と。自分のからだを打ちたたく。「それは苦行、修行のことですか。」と思うかもしれませんが。同じパウロが書いた手紙でローマ8:13ではこのように表現されています。それは必ずしも肉体をいじめる、禁欲をするといったものとは違うものであります。『もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。』パウロが第一コリント9:27で言っている「自分のからだを打ちたたいて従わせる」というのは、ここでは、「御霊によって、からだの行ないを殺す」とあります。「御霊によって」というのがポイントです。肉によって自分の肉をうちたたくのではないです肉によって自分の肉を殺すのではないのです。修行や、苦行や、滝に打たれてとか。そういうことではないわけです。お坊さんにバシッと叩かれるとか、そういう話ではないわけです。そうでなくて、ここでは「御霊によって」とあります。人間は3つのもので構成されています。肉体と魂と霊です。で、霊的なクリスチャンは、霊がトップにきています。でも、肉欲的なクリスチャンは、肉がトップにくるわけです。肉が常に這い上がろうとするわけです。肉がトップに行こうとするので、肉を叩くのです。「おまえは下がっている」と。上に来ようとする肉を下げようとするわけです。それが御霊によってなされるわけです。「御霊の実^みは愛」とありますが、その締めくくりは「自制です。」とあります。御霊の実は自制、セルフ・コントロール。御霊によって私たちは自分を律すること、制することが出来ます。セルフ・コントロールが出来るわけです。「酒に酔ってはなりません。御霊に満たされなさい。」御霊で満たされることで、もはや酒に手を出すこともなくなります。酒に飲まれることがなくなるのです。御霊が酒に酔うことよりもっと楽しい、もっとエキサイティングな、もっと満たされる体験になるからです。罪の情欲に駆られて快楽に溺れていた人も、御霊によってより深い喜び、より大きな一時的ではない永続する喜びに与るので、もう興味がなくなるわけです。「もうそんなものに頼らなくても、そんなものを取り入れなくても、そんなものを飲まなくても、打たなくても、もう私は楽しいし、喜べるし、本音で話せるし、そして何よりも虚しくない、満たされるんだ」と。ですから、トップに来ようとする肉を御霊によってコントロールして、支配していく。それが、パウロが言っている「自分の肉体を打ちたたく」ということです。肉の欲に対して私たちは対抗措置がちゃんと与えられています。

次に、『目の欲』という2番目のサタンの戦略ですけれども、すべての誘惑・攻撃はこれら3つの戦略、3つのカテゴリーによるということで、2番目は『目の欲』ということで、今から詩篇101:3を開いて頂きたいと思います。『私の目の前に卑しいことを置きません。私は曲がったわざを憎みます。それは私にまといつきません。』この聖句を是非皆さんのテレビの画面に貼っておいて下さい。インターネットの携帯の画面、またはコンピューターの画面に貼っておいて下さい。『私の目の前に卑しいことを置きません。私は曲がったわざを憎みます。それは私にまといつきません。』また、義人ヨブという人が述べた言葉としてヨブ記31:3、これは義人ヨブが語っているところに注目して下さい。何故、彼が義人と呼ばれたのか。その所以^{ゆえん}とも言って良いと思います。『私は自分の目と契約を結んだ。どうしてお

とめに目を留めよう。』ヨブは男ですから、異性を見て情欲の目で見ないように、自分の目と契約を結んだと。女性であれば、異性の男性に対して適用して良いと思います。これらの言葉を、これらの聖句を私たちはしっかりとテレビ画面や目につくところに貼っておくべきであります。『目の欲』というのは、私たちの周りに溢れております。『目の欲』は飽くことを知りません。箴言 27:20 にもそう書いてあります。『よみと滅びの淵は飽くことがなく、人の目も飽くことがない。』気を付けて下さい。地獄が飽くことがない世界であるわけですが、人の目もまたそれと同様に、それと同じレベルで飽くことを知らないものであります。ですから、自分の目には気をつけて下さい。何を見ているのか。何気なしに見てはいけません。常に自分の目と契約を結んで下さい。そして、その契約に違反するものには目を留めてはいけません。

で、3番目。すべての誘惑・攻撃は、3つのカテゴリー、3つの範疇、3つの策略からなされるということで、1番目は『肉の欲』、2番目は『目の欲』、3番目が『暮らし向きの自慢』とありますが、この『暮らし向きの自慢』というフレーズは、英語の聖書では”pride of life”プライドを自分の生活に持つ、自慢するということです。自分がどんなに良い生活を送っているのか、自分がどんなに素晴らしい人間か、賢いのか。また、プライドですから常に人の目を気にして、良く思われたい、立派な人と思われたい、有能な人と思われたい。それが『暮らし向きの自慢』というものであります。イエス・キリストはご自分を無にされました。英語の聖書で「無にする」というところは、”no reputation”という言葉が使われているんですが、直訳すると「評判を無にする」というふうにも訳せます。イエスは自分の評判については、無にされた。評判など全く気かけない。まったく評判など無きものとしたと言っているわけです。ピリピ 2:7 です。それが、『暮らし向きの自慢』”pride of life”に対抗する措置です。人の評判、自分がどう思われるのか。そんなことはどうでもよいとすること。評判を気にする人たちもこの中にあると思います。人からどう思われているのか、常に気になってしょうがないという人がいると思います。そのように評判ばかり気にしている人は、他人の小さな脳みその中で生きている人のことです。その脳みそはあなたの思う以上に小さいと思って下さい。ちっぽけな人間だと言っているんです。他人の評判など気にしている人は、あまりにも小さい人と言っているのです。人にどう思われるか、その人は他人の脳みその中で生活しているのです。寂しいですね。あまりにもつまらない、小さな人生です。どうだっていいわけです。そんなに小さく生きてはいけません。もっとあなたは大きく生きるべきです。自由になるべきです。解放感を味わうべきであります。人からどう思われるか、イエスは全く気にしませんでした。ご自分を無にしたんです。評判などどうだっていい、誰からどう思われようとどうだって構わない。どう思われるかではなくて、常にその人はイエスのように自分を無にして、そして他者のために「自分はこの人の為になにが出来ようか。どのような助けを与えることが出来るだろうか。」それがサタンの誘惑に対する最高の対抗手段であります。『暮らし向きの自慢』”pride of life”、人からどう思われるか、評判ばかりが気になる。大きな誘惑ですけれども、もう評判などどうだっていい、自分がどう思われたっていい。むしろこの人のために、あの人のために自分は何が出来ようか、何をしてあげられるだろうか、どんな助けを具体的にしてあげられるだろうか。結果、その人があなたを拒否したとしても、あなたに腹を立てたとしても、激怒したとしても、関係ありません。どう思われるか、関係ないのです。イエス・キリストは全ての人のために、全世界の罪のために、なだめの供え物となって下さいました。ある者はイエスにつばきをかけました。ある者は罵りました、馬鹿にしました。「神の子ならそこから降りてこい」と。「自分を救ってみろ」と。ある者は「除け、除け」と、激しくイエスを責め立てました。人からどう思われるか、そんなことはどうでもいいです。イエスのように他者のために気遣い、ケアをし、イエスのように他者に焦点を当て、フォーカスを当て、イエスのように他者の最善のために生きるということです。それが、サタンの仕掛けてくる『暮らし向きの自慢』に対する対抗手段です。「罵られようと、馬鹿にされようと、激怒されようと構わない。この人のために私は最善のことを言うんだ。最善のことをするんだ。これこそがこの人にとって一番必要なことなんだ」と。どう思われたっていいわけです。理解されなくたっていいわけです。この世のものに対してあなたが重きを置くならば、それらは滅び去ってしまいます。世にあるもの、すべては滅び去るとあります。目に見えるものに重きを置いているならば、残念ですけれどもそれらは消えてなくなりますから、重きを置いてはいけません。

『しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。』と、第一ヨハネ 2:17 は語っています。「主よ。主よ。」と言う者が、皆天の御国に入るわけではありません。父の御心を行う者が、天の御国に入ります。マタイ 7:21 に書いてあります。神の御心、父の御心を行うものが生きながらえるのです。天の御国に入ります。「主よ。主よ。」と言う自称クリスチャンではありません。主の御名によって預言をしたり、主の御名によって奇跡を行ったり、主の御名によって悪霊を出す。でも、父の御心を行わなければ、イエス・キリストの言葉を借りて言えば「私は、その者たちは全然知らない。不法をなす者ども、私から離れて行け。」と、言われてしまうわけです。父の御心を行うものがいつまでもながらえます。父の御心、それは「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。」それが父の御心です。それが父のハートです。

最後に、今日は 17 節で今日は止めたいと思いますけれども、私たちにも様々な悪魔の策略が展開されています。3つのカテゴリーでそれらは表現されていました。イエス・キリストの遭った誘惑もこれら3つで表現されています。パン、これは肉の欲です。この世の栄光栄華、それは目の欲です。そして「この神殿の頂から身を投げてみなさい。それはあなたがミラクルメーカーで高いところから飛び降りても傷1つ負わない。それであなたは英雄になれる。」暮らし向きの自慢、pride of life です。また、これはかつて最初の人々が遭った誘惑にも当てはまります。3つのカテゴリー。エデンの園にあった善悪の知識の木の実、食べてはならないというあの禁断の木の実も、この3つのカテゴリーで全てまとめられています。サタンはこの3つの誘惑をもってあなたを誘惑し、攻撃し、あなたにつまづきを置きます、罠を仕掛けてきます。あなたが罪を犯さなくためにはどうしたら良いでしょうか。今日の学びをその都度、その都度思い出して下さい。その都度、その都度誘惑に打ち勝って頂きたいと思います。罪を犯したとしても、あなたの罪はキリストの名によって赦されています。あなたは、父がどのような方か知っています。そしてあなたは、御言葉によって霊の戦いにおける勝利を手にすることが出来ます。そしてあなたは、「イエス・キリストが結局はすべてだ。イエス・キリスト以外のものは、すべて虚しいのだ。」ということに気付きます。最後には、皆さんには全員、『父たち』になって欲しいと思います。私たちはそうしたサタンの策略にいつも負けてばかりではならない。策略は全て知らされているわけですから、騙されてはいけません。常に誘惑にさらされています。常に誘惑はあって、それは避けられません。でも、それらに対処する、それらに勝利する術はもう既に私たちは教えられていますので、ただそれを実践するのみであります。今いろいろな迷いがある方もこの中にあると思います。『世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。』心を尽くして愛していることにはなっていない、100%の心で愛しているわけではないということが分かります。それは肉の欲でしょうか、目の欲でしょうか、暮らし向きの自慢でしょうか。考えて欲しいと思います。私たちの願いは、私たちが今求めていること、欲していることは、神をより一層愛するものになっているでしょうか。今あなたが願っているもの、あなたが欲しているもの、それは、より一層神を愛するものになっているか。若しくは逆にそのあなたの願うものは、神を愛さなくなるもの、神との関係が弱まるもの。強まるものか、弱まるものか。神との関係を近づけるものか、遠ざけるものなのか。今あなたが願っているものは、どういうものでしょうか。あなたが愛しているものは、一体何でしょうか。神との関係において妥協してしまうものか。それを願っている、それが手に入ったら、神との関係が犠牲になってしまうでしょうか。であるならば、それらは滅び去るものですから、捨てて下さい。折角手に入れたものでも、晴れてそれを手にしても、それが神を愛さなくなるものとなってしまえば、それが神との関係を犠牲にし、妥協し、遠ざけてしまうものであるならば、それらは滅び去るものですから、それらはあなたを誘惑するものですから、注意して下さい。

今日はこれで終わりたいと思いますけれども、また次回 18 節以降『小さい者たちよ。』と言って、反キリストについて出てきますので、世の終わりになると多くの、大勢の反キリストたちが、私たちの周りにも見受けられるようになります。はびこってきますので、その辺も現実的な話として皆さんに注意を促したいと思いますので、また来週集って頂いて、そしてヨハネが私たちに伝えたいこと、願っていること、望んでいることを常に意識して頂いて、一言でそれはキリストの現実を個人的に人格的に体験するという事です。ではこれで終わりたいと思います。